

共感と信頼 黒岩剛仁

昨年の暮れから新年にかけて、会社に提出せねばならない論文（と言っても、レポート程度のものだが）に取り組んでいたため、じっくりとは読めていなかった短歌年鑑（短歌研究と角川短歌）を再読した。その中で、最も刺激を受けた、川野里子の「文語と口語―むしろ『語られぬ文語』の問題として」に触れておきたい。

（前略）文語はそれ自身、語られる必要がないほど泰然と短歌という様式の背後にある、漠然とそう信じられてきたのではなかったか。／しかし、おそらく文語とはそのような「自然な」存在の仕方をしてきたのではない。むしろ文語こそそれぞれの時代の必要、あるいはそれぞれの作者の渴望から生みだし続けられた文体の堆積した地層だと考えた方がいい。

そう主張する川野は、斎藤茂吉が用いた文語について、次のように述べる。

（前略）茂吉の文語に頻出する「なりけり」「けるかも」など粘度濃く重ねられ、繰り返される助動詞。時にはグロテス

クでさえあるアナログで重厚な文語の調べは、茂吉による「新しい文語」であった。

確かにそうだな、と共感した私としては、「戦後短歌は次第に口語化してゆく流れにあったのではなく、文語を拡大開拓してきた歴史として捉えることもできるのではないか」との川野の指摘にも頷かざるを得ず、川野が名前を挙げている山中智恵子から寺山修司までに加え、俵万智のこれまでの営為から生み出された文体すら、その延長線上に位置付けられるのでは、と思った。

また、新年号を飾った多くの作品の中では、「短歌研究」の米川千嘉子「風景」十首が心に響いた。

・ 図書館で眠り醒めたる人の午後帰りたきところを誰も言はざる
 ・ 死の街といひし政治家を責め立てて瓦礫をひきとらないといふ
 国

・ 大川小の背後なる山この黒き傾斜見上げしころの傍へ
 ・ 沈黙を区切り人棲むプレハブは運動公園のまんなかになり
 ・ 瓦礫撤去の車無限の往復し黙せる土を広げあらはす

米川のいつもの端整な作品に比べると、字余りの歌が多く、整っていないとも言えるだろう。しかしながら、実際に被災地を訪ねて詠まれたらしいというを超えて、その地の人々に寄り添おうとする心情が痛いほど伝わってくる。これらの作品を読んで、被災した方々が癒されるのかどうか、私には分からない。ただ、この一連を生み出した作者を私は信頼できる、と感じた。